

拝啓 残暑お見舞い申し上げます。今年も早や8月下旬となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。今年の夏は猛暑続きで大変だったと思いますが、皆様お元気でお過ごしになられましたでしょうか。近所の公園では、今は百日紅が夏の青空に向けて、元気よく赤い花を咲かせています。

今回は、カウマン夫人編著の『日の出に向かって』（日本ホーリネス教団出版部）の9回目ですが、9月12日のところには、次のように書かれています。

「若さは、基本的には霊のことであり、カレンダーの事ではありません。人生の道程を登り切った人は、頭の部分がはっきりと冬のように白くなったとしても、永遠の若さは、まだ心の中に残っているのです。私たちは、60歳、70歳、80歳になってもなお若くあり得る。」

『日の出に向かって』の著者・編集者であるカウマン夫人（1868－1960）は、次のような本を編集・出版されました。

『荒野の泉』 福音文書刊行会、いのちのことば社 1960年(原著1950年)

『山頂をめざして』 いのちのことば社 1963年

『荒野の泉第Ⅱ編』 日本ホーリネス教団出版部 1980年

『日の出に向かって』 // 1986年

『谷間の泉』 // 1994年

『慰めの泉』 // 1997年

『潤った園のように（現代版「荒野の泉」）』 // 1999年

カウマン夫人の霊想の書は、『荒野の泉』が最初だと思いますが、『日の出に向かって』を編集出版されたのは、晩年のことだと思います。内容が、老人を励ます文章が多いと思います。私は、カウマン夫人の上記の御本によって、これまでずいぶん励まされてきました。カウマン夫人は、ご主人のチャールズ・カイマンと共に、日本のホーリネス教会をたてられた方ですが、霊を強調される点では、小西先生と共通点があります。

7月24日から8月3日まで、妻とスイス旅行をしてきました。グリンデルバルトという所の同じホテルに1週間滞在し、近くの山の展望の名所に電車やロープウェイで登って展望を楽しみ、午後はホテルで昼寝という過ごし方で、元気を養うことが出来ました。

帰国後も、ニューヨークに住んでいる次男一家がわが家に滞在し、1週間ほど大阪、岡山方面と一緒に旅行をしたり、孫(6歳と1歳7か月)の相手をしています。1歳7か月の孫(男児)は、何にでも好奇心を示し、寝ているとき以外は片時も目を離せませんが、自分の赤ん坊の時とそっくりのように思え、自分も、生まれて数年は、一切のことを両親や疎開先の人のお世話になりながら大きくなったことを思い知らされています。

今年は台風もよく来る年で、台風が過ぎると急に秋が訪れることもありますが、季節の変わり目、お身体ご自愛のほど祈り申し上げます。

平成30年8月24日

山口周三

エンカウンターのご読者各位